奴隷解放論者としてのリンカーン

マイケル・ジェイ・フリードマン

米国人の中には、エイブラハム・リンカーンはアフリカ系米国人奴隷を自由の身にした偉大な解放者であると考える人々がいる一方で、奴隷制廃止運動に後れを取った日和見主義者、米国の黒人の自発的移住の提唱者、そして白人至上主義者であったと見なす人々さえいる。

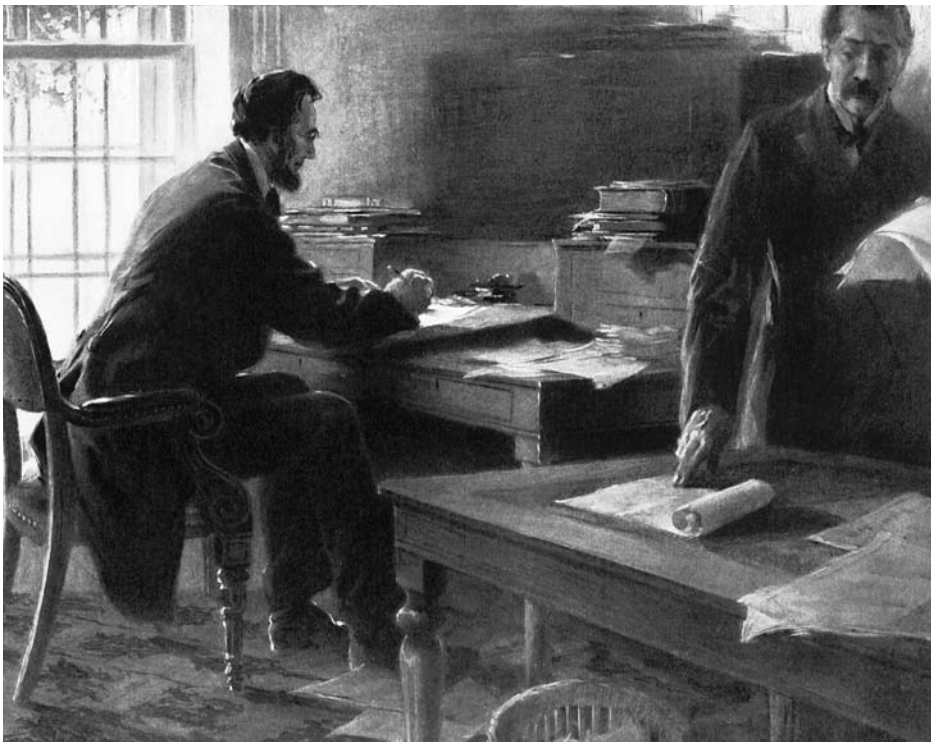
「奴隷とされているすべての者は、同日をもって、そして永遠に自由の身となる」

リンカーンはそのいずれなのか。この問いに公正に答えるためには、彼が生きた時代と国民一般の生活における彼の役割との関連で見極める必要がある。

「わたしは奴隷解放論者と同じように奴隷制を常に強く憎んできた」とリンカーンは1858年に述べた。しかし、政敵のスティーブン・A・ダグラスが、リンカーンは人種的平等に賛成していると非難した際には、「わたしは白色人種と黒色人種の社会的・政治的な平等をもたらすことにいかなる意味でも賛成していないし、これまで賛成したこともない」と応じた。リンカーンはまた、「黒人女性を奴隷にすることを望まないからといって、どうしてもその女性を妻として迎えなければならないという考え方は、偽物の論理である」として攻撃した。そして、南部連合に属する地域の奴隷を自由の身とする解放宣言に署名する直前、リンカーンは大統領として、訪れた自由黒人の代表団に対し、ハイチまたは中央アメリカへの移住を検討することを勧め「われわれ双方にとってその方が良い。別々になった方が…」と語った。

リンカーンの行動の多くは、彼が一生の仕事に選んだのは道徳の唱道者ではなく、優れた歴史家であるジェームズ・M・マクファーソンが書いているように、次のようなものであったことを思い起こせば、大変よく理解できる。

「政治家、可能性を探る技術の実践



陸軍省の電信室で奴隷解放宣言の草稿を練るリンカーン大統領

者、奴隷制廃止原則に同意しながらも、その原則を達成できるのは、世論と政治的現実の漸進的な変化に合わせながら、妥協と交渉を通じて段階的に一歩一歩進むしかないことが分かっていた現実主義者」

世論に従うことがいかに多かったにせよ、リンカーンは、独立宣言の下で人はすべて生命、自由、幸福の追求といった奪うことのできない権利を平等に持っているという信念を常に堅持した。また19世紀初頭から中期にかけての男性にしては、社会的偏見がなかった。アフリカ系米国人の偉大な思想家、出版者、奴隷解放論者のフレデリック・ダグラスは1864年、ホワイトハウスでリンカーンと会見したが、「会見中、わたしは自分の卑しい生まれや不人気な肌の色を思い起こさせられることはまったくなかった」と書いている。「ある紳士が別の紳士に接するのを見かけるのとまるで同じように」大統領はダグラスに接した。ダグラスの結論として、リンカーンは「黒人に対してその不人気な肌の色を意識させることなく、もてなしと対話のできる極めて数少ない米国人のひとりである」としている。

問題の本質

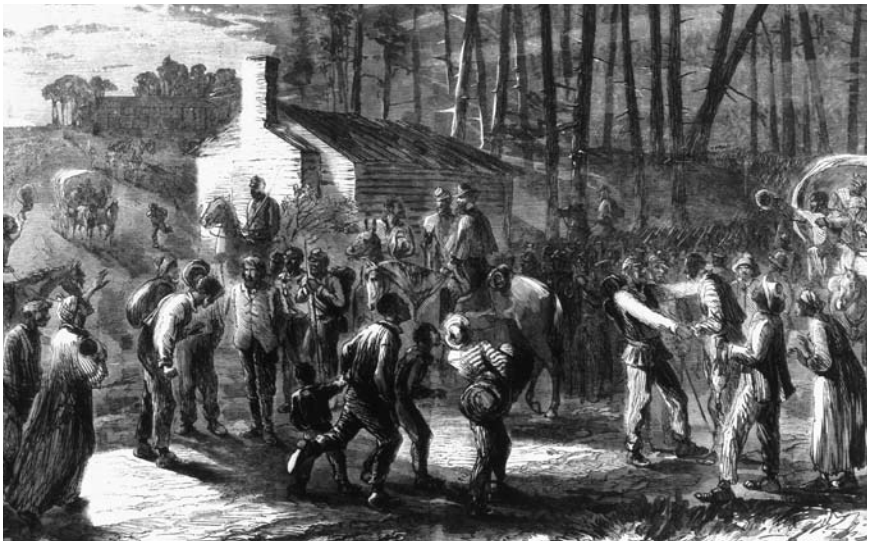
大統領就任前のエイブラハム・リンカーンが看板とした政治課題は、奴隷制が西部準州へ拡大することへの確固たる反対であった。リンカーンにとって、これは道徳にかかわる問題であった。彼は1858年上院選におけるスティーブン・A・ダグラスとの最後の討論で、この点を驚くほど明確に主張し、「問題の本質」を次のように定義付けた。

（この論争は）奴隷制を間違いだと見なす階級と、間違いとは考えない階級の対立によるものです。（中略）正しいとするか、間違っているとするか。これは、この2つの主義主張が世界中で繰り広げる永遠の闘争なのです。歴史が始まったときから互いに対立してきた信条であり、これからもずっと闘いは続くでしょう。一方が擁護するのは人類共通の権利であり、もう一方が主張しているのは、王たちが神から授かったとする権力なのです。

しかし、リンカーンの究極的な政治的忠誠の対象は連邦であった。彼は南北戦争が激化する中で、ニューヨーク・トリビューン紙の影響力の大きい編集者であったホレス・グリーリーにこう書き送っている。「この戦いでわたしが最も重視している目標は連邦を救うことであり、奴隷制を守ることでも破壊することでもない。奴隷をひとりも解放せずに連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。すべての奴隷を解放することによって、連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう。そして、奴隷の一部を解放し、残りを奴隷のままにしておくことによって連邦を救うことができるのであれば、わたしはそうするだろう」連邦を救うという目的のために、リンカーンは奴隷所有制度を維持していても連邦に味方する境界州については、戦争終結まで奴隷を所有することを認めた。ある連邦軍の将軍が自分の責任で南部の一部地域における奴隷制廃止の命令を発したとき、リンカーンはそうした行動を取る権限があるのは大統領だけだとして、直ちにその命令を取り消した。

戦時の政治指導者としてのエイブラハム・リンカーンからすると、問題は北部の世論が奴隷解放を認める段階にまで熟していないことだった。しかし、歴史家のジェームズ・オークスが資料によって裏付けているように、戦争初期のリンカーンの巧みな話術が国民に奴隷解放への心構えを固めさせたのである。デイビッド・ハンター将軍による1862年5月の奴隷解放命令を取り消す声明を出したときでさえ、リンカーンは同様の命令を発する権限が自分にあることを主張する1節を注意深く声明に含めており、6月には、その命令の草案の検討をひそかに開始している。

7月、連邦軍部隊の動きが停滞すると、リンカーンは、今や奴隷解放が軍事的に必要となったと考える、と主要閣僚に静かに伝えた。これはおそらくその通りであり、かつ政治的にも抜け目のないやり方だった。この時点までに、南部連合側では黒人奴隷が労働力の過半数を占めるようになっていた。奴隷たちを連邦側の大義に引き付けることができれば、その戦争遂行体制を強化できると同時に、敵対する連合側の力をそぐことができる。さらに、奴



連邦側に立って戦い、ノースカロライナ州の農園で奴隷を解放するアフリカ系米国人部隊

奴隷解放宣言を読む奴隷たち

（左）ルイジアナ州バトンルージュの農園に集まった奴隷たちと、（上）綿花畑での作業

（上）リンカーン内閣の閣僚に対する奴隷解放宣言の最初の読み上げ
（左）奴隷解放宣言に伴って、連邦陸軍は黒人兵士の募集を行い、第2米国黒人砲兵隊などが編成された。

隷制廃止を支持する北部の白人が増える一方で、奴隷制廃止には反対だが連邦を維持するためにやむを得ず戦っている人々の多くも、奴隷を解放することが戦場でいかに決定的な意味を持つかを理解することができるというわけである。

守られた約束

1862年9月22日、リンカーンは後に「奴隷解放予備宣言」として知られるようになる命令を出した。それは、1863年1月1日を期して、「その人民が合衆国に対する反逆状態にあるいずれかの州もしくは州の指定された地域において、奴隷とされているすべての者は、同日をもって、そして永遠に、自由の身となる」という別の命令を大統領が出すことを発表するものであった。

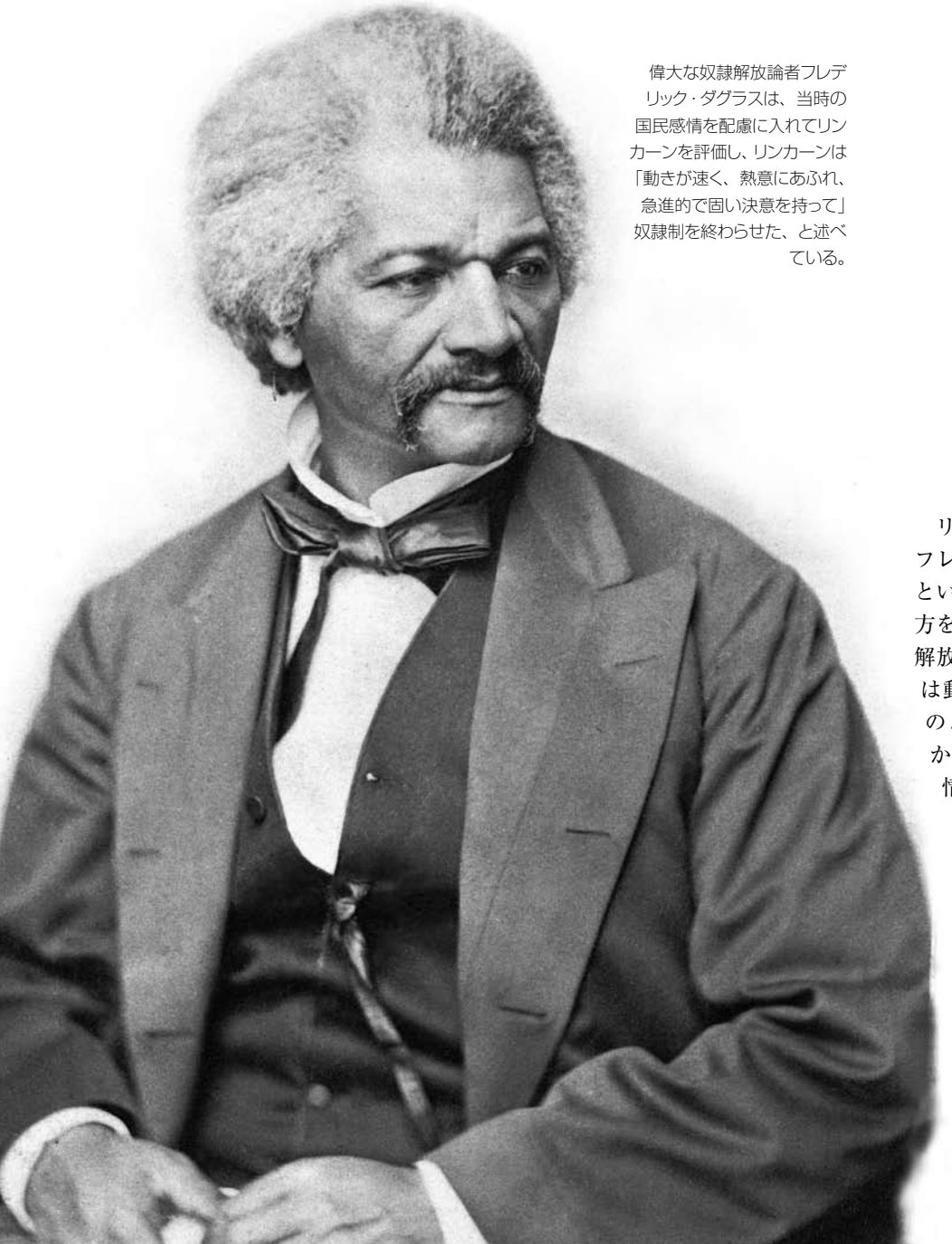
新年になって、リンカーンは約束を守った。奴隷解放宣言は、南部連合内のすべての奴隷は「自由の身であり、今後も自由であることを、そして陸海軍当局を含む合衆国行政府が、かかる人々の自由を認め、これを維持する」ことを表明した。また連邦としては、黒人兵士を採用し、戦場に出動させる

意思があることを発表した。

後にアフリカ系米国人の指導者となるブッカー・T・ワシントンは、奴隷解放宣言が彼のいた農園で読み上げられた時、7歳ぐらいだった。彼は1901年に発表した回顧録『Up From Slavery』（奴隷から身を起こして）の中で次のように回想している。

> 偉大な日が近づくにつれて、奴隷居住区ではいつもより歌声が多くなった。歌声はそれまでより大胆に響き渡り、夜遅くまで続くようになった。聞こえる労働歌の歌詞のほとんどは、何らかの意味で自由に言及するものだった。（中略）よそから来たと思われる人（合衆国の役人だったと推測する）が短いスピーチをし、次にかなり長い文書を読み上げた。それが奴隷解放宣言だったのだと思う。それが終わった後、わたしたちはみんな自由であり、好きな時に好きな所へ行ってよいと告げられた。わたしの脇に立っていた母は、腰をかがめて子どもたちにキスをした。喜びの涙が彼女のほおを伝っていた。彼女はこれがどういうことなのかをわたしたちに説明し、この日が来ることを長い間祈っていたが、自分が生きているうちには来ないのではないかと心配していたと話してくれた

リンカーンは、政治の場においては、奴隷解放が軍事的な理由から必要だと主張し続けた。「わたしがそうしたように、奴隷解放をてことして使わない限り、いかなる人力を用いてもこの反乱を鎮圧することはできない」とリンカーンは書いている。



偉大な奴隷解放論者フレデリック・ダグラスは、当時の国民感情を配慮に入れてリンカーンを評価し、リンカーンは「動きが速く、熱意にあふれ、急進的で固い決意を持って」奴隷制を終わらせた、と述べている。

> もし彼ら（アフリカ系米国人）がわれわれの側に立って命を懸けることになれば、彼らの動機も最大限に高まるに違いない。（中略）そして、約束は守らなければならない。（中略）どうしてわれわれに裏切られることを承知の上で、彼らがわれわれのために命をささげるだろうか。（中略）そんなことをしたら、わたしはやがて、そして永遠に、そしりを受けるだろう。どうなろうとも、わたしは友人と敵に対する約束を守るつもりであることを世界に知らせなければならない。

リンカーンの死後10年以上たって、フレデリック・ダグラスは、奴隷解放という大義へのリンカーンのかかわり方を説明しようとした。そして、奴隷解放論者と比較すると、「リンカーンは動きが遅く、冷淡、鈍感、無関心のように見えた」と書いている。しかし、「当時の米国における国民感情、つまり、リンカーンが政治家として耳を傾けなければならない国民感情があったことを考慮に入れれば」、リンカーンは「動きが速く、熱意にあふれ、急進的で固い決意を持っていた」という。おそらく、いかなる政治家でも彼が成し遂げた以上のことはできないであろう。